小學日本文典

田中義廉著

三

ホ 2
435
2

東京高等師範學校圖書
醍醐藏書
明治 年 月 日 寄贈
和 489 2
四 495 2

小學日本文典卷之三

田中義廉 著

第二編下

第二十三章 動詞

動詞を事物の作動、仕業等、百般の狀態を示ほすものにして、實に文章中、主格の名詞と共に最、首要の詞なり。故に一の動詞を缺くときは、全く文章をなさず。されども、これを以て、意義を通曉することを能ぐ。

假令ば、鳥が能く飛ぶといふとき、鳥を主の名詞にして、飛ぶを動詞なり。此の如く主と

動詞と、連結するときは、全き文章を為さぬ故なり、其意義も能く通暁せり。然るを今　鳥が能く　るものといふときは、全き文章を為すべきを以て、其意義も通暁すること為し。此故に説話、文章を論ぜば、一の動詞を缺くときは、全體を為すべきものと知るべし。

動詞には種類、活用、法及び時限あり、又動詞の中には、分詞、助動詞の別あり、今これを逐次に説示せん。此次第を審らに悟らばば、全く文體を理解するものあり。

第二十四章　動詞の種類

動詞の種類は、他動詞、自動詞あり、一にこれを動詞の性といふ。又作動の能く他に移るると、他に移り来るとに従て、能動、受動の別あり。

他動詞は、文主の作動能く他の物品に及達するをいふ、故に物品を缺くときは、意義の解し難きあり。假令ば　人が書を讀む　或は　風が木を倒す　といふ動詞にして、人或は風ある文主の作動、能く書或は木ある物品に移りたるを示せり。故に只　人

が讀ム　風が倒ス　などのごとくいふときは、全く文章をなさゞる故に、何物を讀む、何物を倒すかを解せらることなし、依て此類の詞を他動詞といふ。

自動詞も、文主獨、自ら作動するものにして、他の物に移ることなし、故に物品を缺くとも、其意義の、能く通曉せらる詞をいふ。假令ば　人が眠ル　山が聳エ　などいふとき、眠ル又聳エなる詞を自動詞なるを以て、人又山なる文主の作動を、他に移ることなくして、其意義を解せらるゝを得

多なり。故に此類の詞を自動詞といふ。

其外、自他両様に作動する動詞あり、こゝに之を普通性といふ。假令ば　彼ハ新聞ヲ語ル　といふとき、語ルを他動詞となりて、彼なる文主の作動、能く新聞に移るものなれども、こゝに又　彼ハ獨語ル　といふときは、自動詞となるを以て、文主の作動を、他の物に移ることなきが如し。今又風が能く吹ク　といふとき、吹クなる詞も自動詞となるを以て、風なる文主の作動を、他の物に移ることなし。然るに之に移ることあり。風が人ヲ吹

クとつゞまるとを、吹ある詞を他動詞とするを以て、風の作動を能く人なるものゝ移るが如し。

○此等の詞を、甚だ數多にして、且自他ともに形狀を變ずることふし。故に其徴を、只文章中第四格の名詞の有無に由て、他動、自動の區別を生ずるものと知るべし。

さて元來の他動詞にして、自動詞となるものを、必ずル（命令の言）なる自動詞と結合し、又元來の自動詞にして、他動詞となるものを、必ずス（為）なる他動詞と結合するものなり。今それを左表に掲示

他動詞	他動の形	自動の形	自動詞	他動の形	自動の形
碎	クダク	クダクル	驚	オドロク	オドロカス
燒	ヤク	ヤクル	乾	カハク	カハカス
缺	カク	カクル	逃	ニグ	ニガス
削	ソグ	ソグル	聽	キク	キカス
拔	ヌク	ヌクル	落	オツ	オトス
開	ヒラク	ヒラクル	死	シヌ	シナス

ます。此規則に從らずして、自他両様に作動するものも、皆普通性の動詞なり。

成	ナス	ナル	惑	マドフ	マドハス	割	ワル	ワル	枯	カル	カラス
貸借	カス	カル	迷	マヨフ	マヨハカ	折	ヲル	ヲル	来	キタル	キタス
閉	トヅ	トヅル	眠	ネムル	ネムラス	切	キル	キル	劫	オビユル	オビヤカス
延	ノブ	ノブル	起	オクル	オコス	治	オサム	オサマル	醒	サムル	サマス
集	アツム	アツマル	出	イヅル	イダス	定	サダム	サダマル	滅	ホロブル	ホロボス

他動詞自動詞共ニ皆作動の次第ニ従て、能動、受動の別あり。さて能動と、此物の作動、能く他の物ニ及達するを云ひ、受動と自ら他の物の作動を受くるを云ふなり。假令ば

風ガ木ヲ倒ス　教師ガ生徒ヲ教ノ

作動を、生徒及び風の作動と、教師及び風の動とい。今又ヲ及達するを以て、うけを能ヘラル

木ガ風ニ倒サル　生徒ガ教師ニ教

徒及び水と、教師及び風の作動を受くるを以て、

これを受動といふなり。

他動詞の能動と、本然の形を變ずることあり。其受動を、ル（被、此詞を有形ある、ルの約言）ある助動詞と結合ス。此詞の變畫を於ても必ズル、レラルレラレ等ある詞を變化ス。又自動詞の能動を、ス（為）ある助動詞と結合ス。此詞の變畫を於ても皆セシ等ある詞を變化して其受動も、一旦他動の形となり、後亦ルラルル等ある助動詞と結合ス。此詞の變畫も、他動詞のルと同じ。

茲にルラルスある詞を、動詞を結合して、恰も詞尾の如くあれども、其實は助動詞にして、他

の詞尾と全く異なり。（第二十六章分詞の條、及び第二十七章助動詞の際を見べし。）

さて他動詞、及び自動詞の能動、受動、及び變畫を、左表に掲示ス。

		能動の形	受動の形	變畫
他動詞	碎 クダク	クダカル	クダカレ	クダカル、クダカレ
	沼 ヌサム	オサメラル	オサメラレ	オサメラル、オサメラレ
自動詞	眠 ネムラス	ネムラサル	ネムラサレ	ネムラサル、ネムラサレ
	驚 キドロカス	オドロカサル	オドロカサレ	オドロカサル、オドロカサレ

他動詞の受動、及び自動詞の能動、受動も、本然

の詞尾を、ア韓又エ韓の音に變じて、助動詞と結合するものあり。

第二十五章　動詞の活用

我國の動詞を、作動の次第、法、及び時限に從て、或を分詞とあり、或を助動詞と結合し、或を獨立して、名詞とする等に於て悉く其形を變畫し、これを動詞の活用といふ。さて此活用中、ア イ ウ エの四韓に變ずるものあり、これを四段活用の動詞と云ひ、イ ウの二韓に變ずるものあり、これを中二段活用の動詞といひ、又ウ エの二韓に變ずるものあり、これを下二段活用の動詞といふ。此三體の活用を離れざるもの多し、規則動詞と名づく。此他僅に一段活用のものと、三段活用のものあり、これを不規則動詞と名づく。猶左の表に於て、詳に活用の格を知るべし。

規則動詞の表（一にこれを動詞の變畫圖といふ。）

第一轉	ばに結合して接續法を示ひ、又ふに結合して結合法を示ひ、未來を示ひ、ベ又ジに結合して否不を示ひ、	第二轉	名詞とするもの、ヲに結合して接續を示ひ、又ヲに結合して結合法を示ひ、他の詞と連合して集合名詞の體をなすもの
第三轉	現在の不定法にして、動詞の本體なり、○名詞となるもの、○ベキ ベカリ ニコトヲ等に結合して接續法を示ひ、	第四轉	命令法 接續法 命令法なり、○ベドモに結合して接續法を示ひ、

四段活用

飽	押	打	逢	住	有
アカバ・ムン・ズ／ヌジ	オサ	ウタ	アハ	スマ	アラ

第一轉

アキテ・ヌダタリ／シケリ	オシ	ウチ	アヒ	スミ	アリ

第二轉

アタベキベク・ケリ・ニ・コト・ト等	オス	ウツ	アフ	スム	アル

第三轉

アケヨ・ベド・ドモ	オセ	ウテ	アヘ	スメ	アレ

第四轉

中二段

戀	落	起		
コヒ	オチ	オキ／バ・ムン・ズ／ヌジ	第一轉	
コヒ	オチ	オキテ・ヌダタリ／シケリ	第二轉	
コフ	オツ	オクベキ／ベク	第三轉	第一行
コフル	オツル	オクタル／ケリ／ト		第二行
コヒ	オチ	オキヨ	第四轉	第一行
コヒレ	オツレ	オクレバ／ヨバ／ドモ		第二行

活用

恨	老	用		
ウラミ	オイ	モチヰ	第一轉	
ウラミ	オイ	モチヰ	第二轉	
シラム	オユ	モチウ	第三轉	第一行
ウラムル	オユル	モチウル		第二行
ウラミ	オイ	モチヰ	第四轉	第一行
ウラムレ	オユレ	モチウレ		第二行

下二段活用

受	痩	捨	譽	流	消
ウケ／バ・ムン・ズ／ヌジ	ヤセ	ステ	ホメ	ナガレ	キエ
ウケテ・ヌタリ／シケリ	ヤセ	ステ	ホメ	ナガレ	キエ
ウケ／ベキ／ケリ／ト	ヤス	スツ	ホム	ナガル	キユ
ウケル／ケリ／ト	ヤスル	スツル	ホムル	ナガルル	キエル
ウケヨ	ヤセ	ステ	ホメ	ナガレ	キエ
ウケレバ／ヨバ／ドモ	ヤスレ	スツレ	ホムレ	ナガルレ	キエレ

表中第三轉ニ於テ、四段活用の動詞ニ、總テ他の詞ト結合セルトキハ、其形ヲ變ジテトアリ。ラル此活用ニ、分詞トアルトモ、同形ナル故ニ。然ルニ、二段活用の動詞の分詞トアリテ、形容詞の用ヲナストキニ、現在の不定法ト同形アルベシ。ソレ、必ズ第三轉第二行の活用に從ひ、其詞尾ニ、ルの字ヲ加フルヲ法則トス。又第四轉ニ於テ、四段活用の動詞ニ、命令法、接續法トモニ同形アリ。然れども、二段活用の動詞に於テ、接續法ヲナストキニ、必ズ第二行の

活用トシ、ドモ、ドモ續ニ、ナルモノアリ。今畧表ヲ左ニ擧ゲ。

四段活用の動詞		中二段活用の動詞		下二段活用の動詞	
第三轉の活用直ニ形容詞トアルもの、	命令法	分詞トアリテ形容詞の用をなすもの、	命令法	分詞トアリテ形容詞の用をなすもの、	命令法
	接續法		接續法		接續法
スムイ（住）家 スメロ スメドモ		オツル（落）ユキ（雪） オチヨ オチレドモ		ナガレ（流）ミヅ（水） ナガレヨ ナガルレドモ	
アフサカ（逢）（坂） アハヨ アハドモ		オツル（老）ヒト（人） オイヨ オエレドモ		ホエル（吠）コエ（聲） ホメヨ ホエレドモ	

ナルモ多ク、動詞ニモ、第一、第二、第三、第四轉の活用ナリテ、其活用毎ニ、各詞尾ヲ變化セルモノニ、四段活用の動詞トいひ、第一、第二、第四轉ト第三轉の

活用に於ては、詞尾を變化するを、二段活用の
動詞といふなり。

但二段活用の動詞に於けるは、第三轉、第四轉
にて、各二行の變畫ありて、恰は四段に活用を
なすに似たり。然れども、其實は唯オキ、オク（起）ウ
ケ、ウク（受）とのみ、變化するものにして、此ルレ
を加ふるを、アル、アレなる動詞と、結合するな
り。故にオクルヒトといふを、オキアルヒトと
いふに同じく、又ウクレドモといふは、ウケア
レドモといふに同じ。（猶助動詞の部を見るべし、）

十規則動詞の表

	鑄	射	着	似	煮	干	見	居	蹴
一段活用									
第一轉	イ（バ○ム○ズ）	イ	キ	ニ	ニ	ヒ	ミ	ヰ	ケ
第二轉	イ（テ○又タ タリ シ ケリ）	イ	キ	ニ	ニ	ヒ	ミ	ヰ	ケ
第三轉 第一行	イ（ベキ ベク）	イ	キ	ニ	ニ	ヒ	ミ	ヰ	ケ
第三轉 第二行	イル（[illegible]）	イル	キル	ニル	ニル	ヒル	ミル	ヰル	ケル
第四轉 第一行	イ（ヨ）	イ	キ	ニ	ニ	ヒ	ミ	ヰ	ケ
第四轉 第二行	イレ（ドモ ド）	イレ	キレ	ニレ	ニレ	ヒレ	ミレ	ヰレ	ケレ

	第一轉	第二轉	第三轉	第四轉
三段活用	来 コ	キ テ○ヌタダ シ ダ	第一行 ク ベキ ベク	第二行 ス スル セ スレ
	為 セ		第二行 クル ○	第一行 コ ○

一段及び三段活用の動詞の變畫法を、二段活用の動詞と異なることなし。

第二十六章　分詞

前章にて説示したる系、動詞の活用を、猶詳に理解せしめん為に、茲に分詞を擧げ論じ。抑動詞の活用中、第三轉を現在の不定法とし、これ動詞の本然の形なり。其他第一、第二、第四轉に於けるものも、皆本然の形を變化せるものにして、此變化の中、形容詞の用をなすものあり、これを分詞といふ。如何となれば、此詞を元来動詞の變畫にして、文主の作動を示すのみ、又形容詞の用を兼ねるを以て、両部分の詞に渉る故に、分詞と名づくるなり。さて分詞に二種あり、一を能動分詞といひ、一を受動分詞といふ。これ皆名詞の前にあるを通常の形とす。

さて形容詞の用をなすに於て、四段活用の動詞も、本然の形を變じることあり。假令ば打ツ

とゝとき、動詞の本然の形なれども、打ツ人　とゝとき分詞にして、形容詞の用をなすが如し。又二段、一段及び三段活用の動詞に於ても、必ず第三轉第二行の活用を以てし、故に本然の形に於て、落ツ　流ル　見ル　為ル　といへども、形容詞の用をなす分詞に於ても、必ずルあり。詞尾を加つゝ、落ツル雪　流ル、水　見ル人　為ル事　といゝが如し。

今能動分詞と、受動分詞の區別を知らしむる為に、略表を左に掲ぐ。

	四段活用	中二段活用	下二段活用	一段活用	三段活用
能動分詞	打ツ人	落ツル雪	流ル、水	見ル人	為ル事
	開クル戸	用ヰル人	捨ツル物	射ル矢	来ル人
受動分詞	打タル、人	落トサル、雪	流サル、水	見ラル、人	為ラル、事
	開カル、戸	用ヰラル、人	捨テラル、物	射ラル、矢	来ラル、人

猶第二十四章、動詞乃種類を參へ見るべし。

分詞の中に、全く形容詞の如く名詞の位を冒すものあり、即　打手　落葉　鑄型　等の如し。又名詞と結合して、全く形容詞となるものあり、即　打チ　落チ　流レ　等の如し。

此他稀ゐを、形容詞の用をかまだして、ツ、ナガラ等ある接續詞と結合して、現在（第二十八章に出づ）の作動を示ばかの例、即　雪ハ降リツ、　吾ハ書ヲ讀ミナガラ　等の如し。

第二十七章　助動詞

既ゐ記示ゐ如く、動詞の形を變畫ゐを、動詞の活用といふ。而して此活用を、作動の次第、法及び時限等を定ける為ゐ、大有用のものにして、又其活用をあるゐを、全く動詞の形を變ゐるものなり。（只三段活用の動詞あり、唯詞尾を變ゐるのみ。）然ども多くを此活用を示ばゐ、他の動詞の助けを藉つ、此動詞を助動詞と名づく。

助動詞の格別あるものを、有得為の三詞あり、此詞を、凡百の作動に渉るを以て、何れの動詞も、此三詞の意を含まるものあり。故ゐ又ゐ動詞の根元といふ。此詞も、他の動詞と結合して、其助をあるもの、又獨立して、意義をかばてとあり。其他獨立せざるして、必ず他の動詞と結合ゐる助動詞を、ル（被）タ（タの畧）タリ（デアリの約言）シ（キの轉）キ（ケリの約言）ケリ（タリの轉）ナリ（ニアリの約言）又（ゐ去の義にて半過去を示ば詞あり、○否不を示ば

（動詞のみこそ全く異なり、皆未来を示す詞）あり。此類の詞を、猶数多あれども、皆本常普通のわつにあらざるを、茲に載せたり。（猶日本大文典及び日本文典外編、テニヲハの部に詳なり。）

此等を他の動詞と結合して、其活用を示すに、最要用のものあり。今これを、法と時限の部に於て、逐次に説示すべし。

第二十八章　動詞の法

大凡文を綴り、或は説話をなすに方りて、作動の次第を定め、自他の區別を現すに定則あり、これを動詞の法という。さて法に五個あり、即不定法、直説法、命令法、接續法、疑問法なり。

不定法は文主なく、唯時限を定めて、作動を一般に示すものなり、即　行キタリ　行ク　行カン　等のごとし。

直説法は平常の説話にして、文主の作動を直に説示するものなり、即　吾ガ行キタリ　吾ガ行ク　吾ガ行カン　等の如し。（此法は不定法に文主の名詞を配合したるものなり、）

命令法は、使令をあらはす用ある法にして、亦希求、

勸止等を示はす此法ヲ屬ス。さて使令希求等を
ふくんと欲する人を、必ず眼前ヲ在るべきを以
て、時限を常に現在あり、即　汝ヨ行ケ　茲ニ在
レ　予ヲ助ケヨ　君ヨ行キ給ヘ　ナ行キソ
行クコトナカレ　等のごとし。
茲ヲ、ヨの字を、使令を示す感詞あり。　ナを否
不を示す副詞にして、ナカレをナクアレの約
言あり。
接續法を、文章の接續を示すものあれど、常に接
續詞のドドモトトヒトキバヲ結合す、即　令汝

行ケド　彼ハ行キタレドモ　令行クト　彼ハ
行クトモ　彼ノ行クトキ　汝行カバ　等の如
し。
疑問法を、疑惑して、人ヲ尋ね問ふときヲ用ふる
法にして、必ず疑問副詞のカヤゾを結合するも
のあり、即　汝ハ既ニ行キタルカ　予ハ令行ク
ベキヤ　此ノ如キモノハ何ゾ　ソレハ誰ナル
ゾ　等のごとし。
此五法を、作文、説話の要須にして、我國一切の言
語、皆此法ヲ漏るることなし。今猶其詳解を知ら

しめん為ニ、助動詞及び時限と配合して、第二十九章ニ説示ス べし。

第二十八章　動詞の時限

動詞の時限を、過去、現在、未来の三時あり。又これを小別して、第一現在、第二現在（一ニ半過去とも云ふ）過去、第一未来、第二未来とす。

過去を、既往の時ニ方あて、ふしたる作動を示はしものあり、即　彼ハ前日他國ニ行キタリ　予ハ此事ヲ昨年告ゲラレタリ　等のごとし。

第一現在を、現今作動する仕業を示はすものあり、即　予ハ今行ク　彼ハ日今教ヘラル　等の如し。

第二現在、即半過去を、現今ふしたる作動の、漸く終ラんとする瞬間を示し、或を既ふしたる仕業を、目今説話ふる時限を示はしものあり、即　彼ハ今他國ニ行キシ　今午時ノ鐘ヲ撞チヌ　或ハ先刻マデ予ハ教ヘラレシ　等のごとし。

此時限を、平常の説話ニ多くもちいて、且要用のものなれども、文章に於ても、特ニ過去と混じ易し。唯文章中、現在を示ス副詞（今）と、説話に

る時限の現今なるを從て、其區別を定む。故に第一現在と、過去なる兩時限の、一和しなるものを知るべし。

茲に擧げたるシを、元來トの轉にして、過去を示す助動詞なれども、亦文意に從て、半過去ともなるものなれば、今暫くこゝに收む。

第一未來を、今より後に於て、作動せんとする仕業を示すものなり、即　明日此地へ來ルナラン

予ハ後日他國へ行カン　出デ行カン人ヲ止メハ　等のごとし。

第二未來を、將來の時限に於て、則ちまだ事を示し、或は既に爲したる歟を考察して、說示するに用ふるものなり、即　彼ハ明朝來ルデアラン　明日ハ此書ヲ讀ミ終ルコトモアルナラン　或ハ行ク駒モ不破ノ關ヲバ越エツラン　明日を　今時既ニ學校ニ到リテアラン　彼ハ最早彼地ニ到着シタルナラン　等の如し。（茲ニ越エツラン　と　越エ）

（テアラン　の約言なり、）

猶此時限を審に示さん爲に、次章に於て、動詞と助動詞と配合の例を擧ぐ、宜く就て參考すべし。

第二十九章　配合の例

以上に論説したるものを、猶分明に理解せしめんが為に、茲に配合の例を掲ぐ。抑此配合を、動詞の法、及び時限を示すに、大有用のものなれバ、反覆玩味して、其次第を審に理解すべし。

	不定法			直説法			命令法			接続法			疑問法	
	アル（有）	ウ（得）	ス（為）											
第一現在	アル	ウ	ス	予ガアル	予ガウ	予ガス	汝ヨアレ　アレ	汝ヨエヨ　ウレ	汝ヨセヨ　スレ	アレバ　アルナレバ　アルトモ	ウレバ　ウルナレバ　ウルトモ	スレバ　スルナレバ　スルトモ	アレカ　アリヤ	ウルカ　ウルヤ
第二現在（半過去）	アリシ	エシ	セシ	予ガアリシ	予ガエシ	予ガセシ				アリシナレバ、アレドモ　アリシトモ、アリシナレドモ	エシナレバ　エシトモ　ウレドモ	セシナレバ　セシトモ　スレドモ	アリシカ　アリシレヤ	エレカ　エレヤ
過去	アリタリ	エタリ	シタリ	予ガアリタリ	予ガエタリ	予ガシタリ				アリタレバ　アリタリトモ、アリタレドモ	エタレバ　エタリトモ、エタレドモ	シタレバ　シタリトモ、シタレドモ	アリタルカ　アリタリヤ	エタルカ　エタリヤ
第一未来	アラン	エン	セン	予ガアラン	予ガエン	予ガセン				アラバ　アランナラバ　アラントモ	エナバ　エンナラバ　エントモ	セナバ　センナラバ　セントモ	アランカ　アランヤ	エンカ　エンヤ
第二未来	アルデアラン	ウルデアラン	スルデアラン	予ガアルデアラン	予ガウルデアラン	予ガスルデアラン				アルデアラバ　アルデアラントモ	ウルデアラバ　ウルデアラントモ	スルデアラバ　スルデアラントモ	アルデアランカ　アルデアランヤ	ウルデアランカ　ウルデアランヤ

法	スルカ スルヤ	セルカ セシヤ	シタルカ シタリヤ	センカ センヤ	スルデアランカ スルデアランヤ

今猶助動詞と結合して、法及び時限を、精密より説示せん為め、四段活用、中二段及び下二段活用の、動詞を擧げて、其變畫を左に載せ。

不定法并に直説法

四段活用〔打〕	中二段活用〔閉〕	下二段活用〔受〕
第一 能動	クツ クツナリ	トヅ トヅル　トヅルナリ	ウク ウクル　ウクルナリ
現在 受動	ウタル ウタルヽ	トヂラル トヂラルヽ	ウケラル ウケラルヽ
第二 能動	ウチヌ ウチシ	トヂヌ トヂシ	ウケヌ ウケシ
現在 受動	ウタレヌ ウタレシ	トヂラレヌ トヂラレシ	ウケラレヌ ウケラレシ

過去 能動	ウチタリ ウチケリ	トヂタリ トヂケリ	ウケタリ ウケケリ
過去 受動	ウタレタリ ウタレケリ	トヂラレタリ トヂラレケリ	ウケラレタリ ウケラレケリ
第一 能動 未來	ウタム　ウツナラン ウタン　ウツアラン	トヂム　トヅルナラン トヂン　トヅルアラン	ウケム　ウクルナラン ウケン　ウクルアラン
第一 受動 未來	ウタレン ウタルヽナラン	トヂラレン トヂラルヽナラン	ウケラレン ウケラルヽナラン
第二 能動 未來	ウツデアラン	トヅルデアラン	ウクレデアラン
第二 受動 未來	ウタルヽデアラン	トヂラルヽデアラン	ウケラルヽデアラン

命令法

四段活用〔打〕	中二段活用〔閉〕	下二段活用〔受〕
第 能動 現在	ウテヨ　ウテ	トヅレヨ　トヅレ	ウクレヨ　ウクレ
第 受動 現在	ウタレヨ	トヂラレヨ	ウケラレヨ

接續法

四段活用

		打	中二段活用 閉	下二段活用 受
第一 現在	能動	ウツナレバ ウツトモ	トヅルナレバ トヅルトモ	ウクルナレバ ウクルトモ
	受動	ウタル、ナレバ ウタル、トモ	トヂラル、ナレバ トヂラル、トモ	ウケラル、ナレバ ウケラル、トモ
第二 現在	能動	ウチヌナレバ ウチヌトモ、ウテバ ウテドモ	トヂヌナレバ、トヅレバ トヂヌトモ、トヅレドモ	ウケヌナレバ、ウクレバ ウケヌトモ、ウクレドモ
	受動	ウタレヌナレバ、ウタルレバ ウタレヌトモ、ウタルレドモ	トヂラレヌナレバ、トヂラルレバ トヂラレヌトモ、トヂラルレドモ	ウケラレヌナレバ、ウケラルレバ ウケラレヌトモ、ウケラルレドモ
過去	能動	ウチタナレバ、ウチタリトモ、ウチタレドモ	トヂタナレバ、トヂタリトモ、トヂタレドモ	ウケタナレバ、ウケタリトモ、ウケタレドモ
	受動	ウタレタナレバ ウタレタリトモ、ウタレタレドモ	トヂラレタナレバ トヂラレタリトモ、トヂラレタレドモ	ウケラレタナレバ ウケラレタリトモ、ウケラレタレドモ
第一 未来	能動	ウタンナラバ、ウチタバ、ウタバ ウタントモ	トヂンナラバ、トヂタバ、トヂバ トヂントモ	ウケンナラバ、ウケタバ、ウケバ ウケントモ
	受動	ウタレンナラバ、ウタレタバ ウタレントモ	トヂラレンナラバ、トヂラレタバ トヂラレントモ	ウケラレンナラバ、ウケラレタバ ウケラレントモ
第二 未来	能動	ウツデアラバ、ウチタナラバ ウツデアラントモ	トヅルデアラバ、トヂタナラバ トヅルデアラントモ	ウクルデアラバ、ウケタナラバ ウクルデアラントモ
	受動	ウタル、デアラバ ウタル、デアラントモ	トヂラル、デアラバ トヂラル、デアラントモ	ウケラル、デアラバ ウケラル、デアラントモ

疑問法

疑問法を、全く直説法の終尾又、副詞のヤ、カを加へたるものなれど、茲に載せず。

但二段活用の、動詞の第一現在に於ては、トヅルウクルに又ヤを加へ、トヅル、ウクルに、副詞を加へたるを通則とす。

前段より論じ来たる動詞の法及び時限を、猶審らかに示さん為に、小學讀本中の文を掲げて、説示に

ること左の如し。

人もし身より幸福（接續法）あらんことを願へば（第一未來）

能く其身を脩めよ（命令法）天を善人と（直說法）福と與ふるものあり（第一現在）

汝は書物を（疑問法）得たりや（過去）書物（接續法）あけば（第一現在）

事を學ぶこと（直說法）能はざらん（第一未來）

第三十章　動詞の定音

我國の動詞は一定せる音ありて、其ウクスツヌフムユルウに終るものを、現在の不定法と云ふ、これ動詞の本然の形なり。但一段活用の動詞のみ、此法に由らず、故にこれを不規則動詞と云ふなり。而して又其變畫は於けるも、必ず其行を變ずることなし。假令ばクは外に轉ずることなく。スは終る動詞は、皆サシスセソの外に轉ずること無きが如し。

令略表を左に掲げく、其定則を示さん。

	四段活用	中二段活用	下二段活用	一段活用	三段活用
ア行	○	○	得ウエ	射イ	○

カ行	飽	アカ、アキ、アク、アケ、	起	オキ、オク、	受	ウケ、ウケ、	着	キ	来	キ、ク、コ、
サ行	押	オサ、オシ、オス、オセ、		○	痩	ヤス、ヤセ、			為	シ、ス、セ、
タ行	打	ウタ、ウチ、ウツ、ウテ、	落	オチ、オツ、	捨	スル、ステ、		○		○
ナ行	往	イナ、イニ、イヌ、イネ、		○	兼	カヌ、カネ、	似	ニ		○
ハ行	逢	アハ、アヒ、アフ、アヘ、	恣	コヒ、コフ	交	マジフ、マジヘ、	干	ヒ		○
マ行	住	スマ、スミ、スム、スメ、	恨	ウラミ、ウラム、	礬	ホム、ホメ、	見	ミ		○
ヤ行		○	老	オイ、オユ、	消	キユ、キエ、		○		○
ラ行	有	アラ、アリ、アル、アレ、	降	フリ、フル、	枯	カル、カレ、		○		○
ワ行		○	用	キヰ、キヱ、	飢	ウ、ウエ、	居	ヰ		○

表中の空所を、此行の音に終る動詞ありきもの

第三十一章　集合動詞

集合動詞ヲ數種あり。

第一　二個の動詞の五ヲ結合して、恰も一語の如くなるものあり。即

這入　サカノボル　逆上　遡　特殊　歓待　逐見　頭　ハイル　飛　走　カヘリミル　タバシル

沸騰　ニタツ　ニコム　和　煮　等の如し。

第二　二個の動詞相連結して熟語となり、一の意義をなすものあり。即

枝下　ウケトル　受取　ウケアフ　請合　タチモトル　徘徊　メグリ　キコレメス　閲覧　クダサル

アフ（旋逢）等の如し。

又他の詞と合併するもの三種あり。

第一　名詞と結合して、恰も一語の如くなるものあり。即

コヽロミル（心試見）　ウシロム（後見）　メミユ

ウナヅク（目見）　カイマム（点頭垣間）　ヒダツ（日立）　タムク（手向）

ムシバム（蟲喰）　テラフ（手拂衒）　タナビク（棚摩）　コヽロウ（心得）

トザス（鎖戸）等の如し。

第二　副詞或る形容詞と結合して、恰も一語の如くなるものあり。即

ワカユ（若生）　ヒトリゴツ（独語）　オハス（御座）

等の如し。

第三　タチウチトリサシヒキアヒの如き、意義のあき語を前に置きて、動詞の意味を強くするもの

のあり。即

ダス（乱取）　サシユルス（差）　ヒキワタス（渡）　アヒタノム（相頼）

タチワカル（別立）　ウチマカス（任）　トリミ

等の如し。

此タチウチ等の詞を、元来動詞の變書にして、各本然の意義なきも、自分の意義を失ひて、唯動詞の意味を強くするのみなり。

第三十二章　他の詞より轉じ来る動詞

他の詞より轉じ來りて、直に動詞となるもの
なり。

第一　名詞より轉じ來りて、直に動詞となるもの
のなり。即　ヨドム（淀）　モミヅ（紅）　ヤガル（宿）　キラス
（霧）等の如し。

第二　元來の形容詞の終末ムの字を加へて、動詞
となるものなり。即　赤ム　高ム　廣ム等の
如し。

第三　漢字音の後にス（為）の字を加へて、動詞となる
ものなり。即　論ズ　奏ス　怒ズ　御覽ズ

興ズ等の如し。

第四　漢字音を以て、直に動詞となるものなり。即
シフネシ（執念）　サウゾク（装束）　クユ（薫）　レウル（料理）
ク（飢）等の如し。

此四種の詞も、既に動詞となるものなれ
其活用の格も、亦元來の動詞と異なるなし。

第三十三章　副詞

副詞も、動詞或は形容詞の現ずる、形狀情態を
猶精く示すものにして、常に動詞及び形容詞に
副ひたる詞なり。即　彼ハ夙ニ起キ夜半ニ寢メ

生徒ハ能ク書物ヲ讀ム。彼ハ實ニ善キ友ヲ得タリ　東京ハ甚ダ大ナル都會ナリ　等の如し。

此等の文章に於て、夜ニ夜半ニ、起キ寢ネ、動詞の作動を審定し、實ニ甚ダ、善キ大ナル、などいへる、形容詞の意味を、詳示するものなり。又他の副詞の傍にありて、其意味を審定することなり。即　教師ハ甚ダ親切ニ生徒ヲ教ヘ　師範學校ハ尤早ク教則ヲ定メタリ　等の如し。

茲に甚ダ尤モ副詞あれども、親切ニ早クある他の副詞の意味を、審定するものなり。

第三十四章　副詞の品類

大凡副詞も、其意義の差等に從て、多種ニ分別ス。今其格別あるものを、左ニ列載ス。

第一　位地副詞　茲ニ　彼處ニ　其處ニ　右ニ　左ニ　前ニ　遙ニ　各處ニ　等の如し。

第二　時刻副詞　曩ニ　以前　今　後　初メニ　終リニ　昨日　今日　明日　來年　何時ニ　此時　時ニ　曾テ　又ク　暫ク　等の如し。

第三　及費副詞　毎度　度ヒ　再ビ　屢　不斷

時ニ　何時モ　等の如し。

第四順序副詞　第一ニ　二番ニ　最始　最後　向後　等の如し。

第五分量副詞　多ク　少ク　僅ニ　半　全ク　十分　多量ニ　等の如し。

第六状態副詞　善ク　悪ク　美シク　見事ニ　強ク　弱ク　堅ク　等の如し。

第七決定副詞　慥ニ　必ズ　然リ　宜シ　等の如し。

第八否不副詞　ナ〔勿〕　無ク　否　未ダ　又〔不〕　等の如し。

茲にナ々、動詞の前ニ付ることあり。假令ば　ナコソ〔勿来〕　ナヤキソ〔勿焼〕　等の如し。又動詞の後ニ付ることあり。假令ば　カタルナ〔勿語〕　カヘルナ〔勿帰〕　ユクナ〔勿行〕　等の如し。然れども、皆禁止を示す副詞にして、其意味の異なること有し。

第九種分副詞　唯　別シテ　限リテ　バカリ　ハ　バ　ノミ　等の如し。

茲ニ、ハ及びバカリ、ノミバカリかど、同意なる詞なり。假令ば　都ハ野邊ノ若菜ツミケリ

ヲ於ても、都バカリ野邊ノ若菜ヲツハとゆ
に同ドく。人ニハツゲヨとゆ事も、人ニノ
ミツクヨヲ同ドく。但本年ハ此例ニアラズ
あど事於ても、本年ニ限リテ此例ニアラズと
ゆ事同じ。又秋萩ノ花ヲバ雨ニヌラセド
モ君ヲバマシテヲシトコソ思ヘあど事於
ても、花ヲバカリ君ヲノミとゆ事同じ、決し
テテニヲハのハと混ず可らず。

第十 併合副詞 共ニ兼テ 并ニ 一同ニ
等の如し。

茲にナを、動詞の前ヲ於ることなり。假令ば
ナコソ（勿）ナヤキソ（焼勿）等の如し。又動詞の後
ヲ於ることあり。假令ば カタルナ（語勿）カヘル
ナ（帰勿）ユクナ（行勿）等の如し。然れども、皆禁止を
示す副詞にして、其意味の異なること如し。

第九 種々副詞 唯 別ミテ 限リテ バカリ
ハ バ ノミ 等の如し。
茲ニハ及びバカリノミバカリかど、同意ある
詞あり。假令ば 都ハ野邊ノ若菜ツミケリ

テ於テモ、都バカリ野邊ノ若菜ヲツムトイフ
ニ同トク。人ニハツゲヨ　トイフモ、人ニノ
ミツゲヨテ同トク。但本年ハ此例ニアラズ
アルテ於テモ、本年ニ限リテ此例ニアラズト
イフテ同シ。又　秋萩ノ花ヲバ雨ニヌラセド
モ君ヲバマシテヲシトコソ思ヘ　アルテ於
テモ、花ヲバカリ君ヲノミトイフテ同ジ、決シ
テテニヲハノハト混ズベカラズ。

第十　併合副詞　共ニ　兼テ　并ニ　一同ニ
等の如し。

第十一　推量副詞　疑ラクヘ　恐ラクハ　蓋シ
等の如し。

第十二　疑問副詞　如何様ニ　何故ニ　乎　欤
等の如し。
茲に乎及び欤々、元来感詞なれども、文意と用
法とに従て、疑問を示す副詞となるものあり。假
令ば　時鳥鳴クヤ五月ノ　浪速津ニ咲クヤ
此花　啼クヤ鶯　花ヤ蝶ヤ　又　玉ニモ又
ケル春ノ柳カ　散ル花ゴトニタグフ心カ
あるとて於ても、感詞にして、更に疑問の意味あ

とを云ふも、亦用法不從て副詞とするこゝて、左の例に載せるが如し。假令ば　ワガ思フ人ハ　アリヤナレヤト　紅葉ノハレハ散ルヤ散ラズヤ　又　寢テカ寤テカ　などの如し。此等を皆感詞より轉じ來りて、副詞とするものなり。

第十三　發語副詞　抑　夫　偖　等の如し。

此等の詞を、稀に文意を強くするこゝ多し。必ず、多くを口調の好き為に、文章の初に置くものにして、意果なき詞なり。

第三十五章

副詞を、本來のものと、他の詞より轉じ來るものとあり。假令ば　ナ（勿）、必、即、悉等の如きを、本來の副詞と見る。其他述ニ濃ニなどの如きも、他詞より來りたるを以て、亦本來のものとす。但此等の詞尾ホ又ニを、ナルナリ等に變ずるときを、形容詞とするものなり。然れども此類を、ニアルニナルの約言にして、實を副詞なり、動詞と結合し、分詞とありて、形容詞の用をなすものなり。故に今速ナル馬、濃ナル色といふを、速

第二形容詞の條を見るべし

ニアル馬濃ニアル色といふの約言にして、其速ニ、濃ニを副詞、アルを動詞あるが如し。

さて分明に、他詞より轉じ来るものを、數種あり。

第一キを終る形容詞の詞尾を、クに變じて、副詞となるものあり。即 高ク 早ク 善ク 固ク 樂シク 尊ハベク 紛ラシク 等を、皆高キ、早キ、善キ、固ト、樂シキ、尊ハベキ、紛ラシキ等あるが、形容詞より来るが如し。

又此類の詞尾を、シに變ずるときを、活用の意を示す故に往古を、總てクシキ活用の詞

とあるして、用言（動詞）の中に收めたり。然るとも本然の性質に從て、今これを三種に區別せり。

第二 形容詞の終るキを、ニの字を加へて、副詞となるものあり。即 一ニ 第二ニ 三番ニ 等の如し。

第三 本来の名詞より来るものあり。即 時ニ 日ニ 無益ニ 達者ニ 年ニ 等の如し。

第四 動詞より来るものあり。即 思フニ 假リニ 決シテ 急キテ 至リテ 増シテ 剰サヘ 恐ラクハ 等の如し。

其他數多の詞を集合して、副詞とあるものなり。

假令ば　此時ニ當リテ　然ル故ニ　止ムコトヲ得ズシテ　思ハズレテ　心ナラズモ　石ノ通リ　仰ノ如ク　等の如し。

第三十六章　接續詞

我邦の接續詞に、二種の大區別あり。○第一種は、兩名詞間の關係を示し、或は名詞と動詞との關係を示すものにして、多くは名詞の位地、或は作動の時限を審定するものなり。さて此詞は、常に名詞の後ありて、又後詞と名づくべき

此類の接續詞を、西洋語に於て前詞といふ。又彼國の文章に於ては常に名詞の前にあるを以てなり。又先哲は、これを指示言と云へり。位地、時限等を指示する故なり。近世の文那書（同治八年刻、美國人嘶[illegible]合著にて、文學書官話と名けたる書なり。文那人嘶[illegible]儒[illegible]）にては、示處言と云へり。但我邦に於ては、全く接續の用をなす故に、今これを接續詞の中に收む。

○第二種の接續詞は、事物或は文意を連續し、殊に詞を續き章句を合せ、全文をなすものなり。

第三十七章　第一種の接續詞

此詞とは、名詞の後にありて、互の關係を現はすものにして、位地、時限を指示はるるものなり。假令ば　友アリ遠方ヨリ来ル　に於ても、友ノ来ル位地を示し。　上野ヨリ下谷マデ総テ平地ナリ　に於ても、平地ノ有ル位地を示し。　心ノ中ニ惡念ヲ生スルコト勿レ　に於ても、惡念ノ生スル位地を示し。又　我等ノ周囲ニ空氣ハ充滿ス　に於ても、空氣ノ充滿スル位地を示すが如く。　年ノ内ニ春ノ来ルアリ　に於ても、春

ノ来ル時刻を示し。　晝ノ間ハ日光ヲ見ル　に於ても、日光ヲ見ル時限を示はるが如し。○此等のうち、中ニ周囲ニ内ニ間ハ　なる詞も、ノハ　なる格「テニヲハ」を加へて、恰も名詞の如くなれども、實は接續詞にして、心と惡念、我等と空氣、年と春、晝と日光との、互の關係を示はるるなり。

此接續詞の格別なるものは、ヨリ（自）マデ（迄）中、外、上、下、前、後、周囲、内、裏等なり。

第三十八章　第二種の接續詞

此種の接續詞は、詞を連ね句を合せ、或は章を續

き、文意を連續するものあり。今各一二の例を掲けて、其詳あらを示すべし。

第一 二三の詞を連ねるものあり。假令ば 惟我ト爾トコト有ルカ 夏ト秋ト行カフ空ノ通ヒチハカタヘ涼シキ風ヤ吹クラム 等の如し。

第二 兩三句を連合するものあり。假令ば 空氣ハ凡酸氣三分ト窒氣七分トニ成ル 流レ水ト立ツ白浪ト燒ク塩ト孰カ辛キ渡ツミノ庭 尾花ガ風ニ庭ノ月影 ふどの如し。

茲ニ一ニある詞を、トと其意味の異なるこを示し。

第三 二三の文章を、連續するものあり。假令ば柳葉ハ緑ニシテ桃花ハ紅ナリ 深山ニハ松ノ雪ダニ消エナクニ都ハ野邊ノ若菜ツミケリ 少ト樂シ樂ムト衆ト樂レ樂ムト孰カ楽シキ 等の如し。

第四 前章の意味を、接續するものあり。假令ば此故ニ君子ハ其獨ヲ慎ム 是ニ由テ之ヲ觀レバ人々学ブトキハ賢トナリ学バザルトキハ愚トナル 等の如し。

第三十九章　接續詞の品類

接續詞は、其用法の差等に從て、又それを多種に區別ス。之を接續詞の品類といふ。

第一　合連接續詞　ト　與　及ビ　而シテ　并ニ　且ツ　加之　ナガラ（那。行キナガラの類。）　等の如し。

第二　決定接續詞　此故ニ　然ル故ニ　然レバ　是ニ由テ　等の如し。

第三　原因接續詞　從テ　為ニ　ニ為ニと同意のものあり。假令ば問キニ來テの類に同じ。　等の如し。

第四　位地接續詞　ニ於テ　ニ於テと同意のものあり、假令ば八仞庭ニ舞スの類にて、庭ニ於テといふが如し。　就テ　等の如し。

第五　區分接續詞　又　或ハ　將タ（素欽、漢欽、將欽の類。近代欽の抑之ヲ求ムルに當る。）　抑（必其政ヲ閔ク、之ヲ與フルカ抑ソレトモ亦ことの意あり。全く發語副詞の抑と異る。）　等の如し。

第六　反對接續詞　然レドモ　然レドモ　縱令　雖モ　トモ　ドモ　ドモ（茲に、トモと清ミたる、ドモと濁たるを、現在の時限に屬し、ドモは過去の時限に屬す。假令ば現在の動詞に結合するときは、行クトモ、飯ルトモ、と云ひ、過去の動詞と結合するときは、行タドモ、飯レドモ、といふが如し。猶第二十九章、配合の例を合せ見るべし。）

ハ意ある。

ナガラ（軽少ナガラ、少ナリト雖モトイフ意。）等の類にて、軽し。

第七 設有接續詞 ナラバ モシアラバ トキハ則 否ラザレバ 等の如し。

第八 取捨接續詞 ヨリハ 寧ロ 就中 ヨリ外 ヨリ外ニ問ヒモナシの類。 ヨリ後（ヨリ後ハ、咲初シ時ヨリの類ある。）等の如し。

第九 説明接續詞 譬ヘバ 如何者 即 等の如し。

第四十章 感詞

感詞とは、事物作動に係りて無く、唯喜、怒、哀、楽、驚、嘆等の情に感じて、發する詞をいふ。これ必竟、心に感動することありて、覚えず發する聲にて、詞の意義ある、唯喜、怒、哀、楽等の模様を、強く示したるのみなり。

此詞は、多く發語の如くありて、詞の首に来り、章句の意味を強くするものなり。或は詞の尾に在りて、文意を構成するものなり。假令ば 噫々天我ヲ亡ボセリ の噫、或は 我ヲ助ケヨ ふのヨの如し。然れども又詞の首尾に来ること

を論ずれば、唯口調の好こうん為に、呼ぶもの多し。

第四十一章　感詞の品類

感詞も、亦喜、怒、哀、樂等に從て、各其呼聲を異にすれども、こゝにあげたる感詞の品類といふ、即左の如し。

第一　歡喜の感詞即　アナ　アヽ　（アナシの類）

第二　悲哀の感詞即　アナ　イヽ　（嗚呼、哀、憶、我の類）

第三　驚嘆或は感慨の感詞即　コハ　オヤ　マ　ア　モヲ　等

第四　忿怒の感詞即　ヤオレ　シツ（叱）

第五　鎮止の感詞即　シツ（叱）　シヽ

第六　勸勵の感詞即　サヽ

第七　賞讃の感詞即　ヨシヨ〻（美哉）

第八　希望の感詞即　ドウゾ　ドウガナ　モガナ（人ニ知ラレデ来ルヨシモガナの類）

第九　召呼の感詞即　ヤ　ヨ　ナウ（喃）

第十　發笑及び哭泣の感詞即　ハヽ　カヽ（カヽト笑）

フの類。　ヨヽ（ヨヽト泣クの類）

又兒人アリ　賊ヤリ来リ救ヘ　有リ難シ　痛

哉　氣ノ毒　過テリ　不可（マヒカネ）（近年傳奇文那語）　等の

如き、痛側或を感慨を示す詞も、亦感詞のうちに收む。

其他名物の響音を摸する詞も、亦感詞とす。假令

ドンブリ（丼。水中に物の墜つる音。）

ガラ（瓦石・瓦器などの墜つる音。）

ヘウ（飄。をちこち吹く風の音。）

サツ（颯。風の物に觸るゝ音。）

等の如し。

第四十二章　習煉

前章に於て既に七品詞の用法及び性質を說明せり今猶ゝ書を審に示さん為に一二の文例を左に掲げたり

直說法第一　現在

父母に仕へて孝順なる者天地自然の道にしたがふ

（父母＝名詞第三格　仕へ＝動詞　て＝接續詞　孝順なる＝名詞準格　者＝名詞準格　天地自然の道＝名詞準格　に＝接續詞　したがふ＝動詞）

命令法

人々須臾も此道を離るる勿れ

（人々＝名詞第一格　須臾＝時刻副詞　も＝係助代名詞　此道＝名詞第四格　離る＝動詞　勿れ＝接續詞）

直說法第一　現在

外物の為に己れを奪はれて其道を失ふことあり

（外物＝名詞第三格　の＝接續詞　為＝動詞　に＝接續詞　己れ＝代名詞　を＝接續詞　奪はれ＝動詞　て＝接續詞　其＝指示代名詞　道＝名詞第四格　を＝接續詞　失ふ＝動詞　こと＝名詞　あり＝動詞）

移續法第一　未來

し大地自然の道に由らんと欲せば務めて

（し＝接續詞　大地自然の道＝名詞準形容詞　に＝接續詞　由らん＝動詞ニテ第四格ノ名詞トナルモノ　と＝接續詞　欲せ＝動詞　ば＝接續詞　務めて＝決定副詞）

命令法

邪惡の念を去り善行德義を體認せべし

（邪惡の念＝名詞第一格　を＝名詞第四格　去り＝動詞　善行德義を＝名詞第四格　體認せ＝動詞　べし）

茲ハ孝順ナルハ及び外物ノ為ニモ一句ホて
名詞となるものなり猶巻一第十一章の終ホ
挙げたる例の如し

命令法

天津風雲の通路吹きとめよ乙女の姿しばしとゞめん

名詞第一格　名詞第二格　名詞第三格　名詞第四格　動詞　名詞第二格　名詞第四格　時刻副詞

止め
動詞

此歌も天津風ヲ雲ノ通路ヲ吹キトメヨ乙女
ノ姿ヲ暫シ止メンと云ふの略なり

小學日本文典巻三終

貓窠書屋藏版

日本文典外編
日本大文典　嗣刻

東京書林

小石川大門町　雁金屋清吉
神田通新石町　同　出店　發兌